

風の末裔シリーズ・6thシーズンの8

～山紫陽花～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>



で、せがまれ負けたフウヤが、幼馴染みのシートに頭を下げに行く運びとなる。

「えっ？ 私だって忙しいのよ。機はただって織りかけだし、巫女の仕事もあるのに」

困った素振りをしながらも、シートは、カーリの事となると断らなかつた。

「ひゃあっ!!」

「どっしたの、カーリ?」

「え、枝が動いた!」

尻餅を付いたカーリの眼前で、木の枝の先端がクネクネと踊っている。

「…カーリ、それはシャクトリムシ」

「シ、シャクトリ…?」

「虫よ、虫!」

「はあ、ムシ…、なんて面妖な…」

「擬態っていうのよ」

「はああく、驚いた。三峰では、春になったら木の枝も動き出すのかと思った」

「まさか!」

大きな瞳を寄せて、枝を這う虫を凝視するカーリに、シート

は肩をすぼめて苦笑した。

今、この娘の頭の中では、一斉にうごめきながら枝を伸ばす春の山の風景が、大真面目に展開されているのだろうな。その様子を想像すると、知らず知らずに頬が緩んで来た。

「・・・シート、シート!」

「・・・えっ?!」

気が付くと、目の前にレモン色の大きな瞳がある。

「どっしたの、シート?」

「あ、ううん、ちょっとぼおっとしちゃった」

「へえ! シータでもぼおっとするんだ」

「するわよ」

シートは取り繕うように、今採った草を選び分け始めた。

「あら、この刺繍?」

「ああ——っ!」

フラビを束ねていたハンカチをシートが広げたが、カーリはすぐに取り上げてしまひ込んだ。

「どっして隠すの? もっとよく見せてよ」

「駄目だよ、糸だつて揃っていないし、全然下手くそ。この間

習い始めた所だもん」

「懐かしいわ、その花模様。みんな最初はそれを練習するのよ

ねえ」

「シータもやったの?」

「三峰の女の子はみんなやるわよ。私、その花好きなのよ」

——ヒュ——イ——

霞の空を裂いて、澄んだ指笛がこたました。

「ヤンだわ!」

「そうなの? よく分かるな、シータ」

「ええ、…あら、もう狩りが終わったって? いつもより早いじゃない?」

「えっ、大変! シータ、先に戻って!」

シータには、狩りの仕舞いの祝詞(のりと)をあげる巫女の役割がある。彼女が鎮魂の祈りを捧げて厄を落とさないと、男達は家に入れないのだ。

「カーリは大丈夫?」

「うん、ここからなら一人で帰れる。大丈夫だから、早く早く!」

「じゃお先に、カーリも気を付けて」

シータは多少慌てた感じで、ポニーテールをひるがえして、道を逸れた谷へ駆けて行った。谷は藪だけれど近道で、シータ一人なら、そちらの方が断然早いのだ。

残ったカーリは、山菜かごを背負って、リピツアの所まで登った。尾根の頂上からは、洗濯板みたいに折り重なった三峰の山々が見渡せる。

「早くこの景色を好きになろう」

正直、砂漠の国から、全然違う山岳部落にやって来た時は、不安だった。でも、シータも他の人も、親切にしてくれる。

大丈夫、自分はきつとちゃんとした三峰の女になって、フウヤのいい奥さんになれる。

「うん、頑張ろう」

一人愛馬に吹きかけて、飴色の肌の娘は、綱を引いて尾根道を歩き出した。

カーリと白い馬が、山の中腹の三峰部落にたどりの着くと、何だか気配がおかしかった。とつくにシータが戻って、儀式を行なっている筈なのだが?

「カーリが戻ったわ!」

入り口で、血相変えた女将さん達に取り囲まれた。

「シータは?!」

「かっ、帰ったよっ、先にっ」

急ぎ立てられたカーリは、返事がしゃっくりみたいになった。

「やっぱり先に帰ったんだよな」

人垣から、狩猟姿のヤンが出た来た。フウヤの親友で、年若い抜群の狩猟の腕を持つ、男達のリーダー格だ。

「今日はカーリと山に行くって聞いていたから、彼女に分かるように指笛を鳴らしたんだ」

「ヤン、貴方、狩りの仕舞いの儀式を済ましていないんだから、うるうるしちゃ駄目！」

「口やかましく言う女性達を無視して、ヤンはカーリの目前まで来た。」

「シートとは何処で別れたの？」

「えっ、えっ、シート、帰ってないのっ？」

カーリはしゃっくりが更に酷くなった。

「捜しに行くへー！」

「わ、わらわも…！」

カーリの震え声は女将さん達にかき消された。

「駄目よ、厄を付けたまま山に戻るなんて。私達女衆が行くわ」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょう！ 怪我してたらどうするんだー！」

いつも物静かなヤンの大声を聞いて、カーリは手が震えて山菜力ゴを落っことした。

「まあ、まあ待て」

イフルト族長が人垣を割って来た。シートの父親でもある。

「娘の為に皆に勝手させる訳には行かない。ヤンも落ち着け。」

お前は次期狩猟長なんだぞ」

「け、けど…！」

「まだ事故と決まった訳ではない。とにかく皆、静まれ。厄払いをせぬまま騒動すると、悪い気を呼び込むぞ」

皆のやり取りを聞きながら、カーリはクラクラして息が詰まりそうだった。

わらわのせいだ、わらわが山になんか行きたがったから…。

皆優しいから言わないだけで、自分のワガママはこの部落では非常識で、悪い気を呼び込む物だったのかもしれない。

ぼん、と背中に手が触れた。

「?!」

振り向くと、フウヤのいつものミノっ歯があった。そしてその後ろには…

「シート!!」

皆々の視線の中、罰の悪そうな黒髪の娘が、口をへ字に立て立っていた。

「しゅんなれご…」

「どうしたの、いったい?!」

「何でフウヤと?!」

詰め寄る皆を掻い潜るように、シートは族長の前に出た。

「申し訳ありませんでした、お父さ…族長」

「うむ、どうしたのだ?」

「道に迷ったんです」

「?」 お前がか?」

「油断があったんです、申し訳ありません」

「……」

娘の硬い表情に、族長は深く問い詰めるのを止めた。

何にしても、狩猟の厄落としをしないと、雑談も出来ない。

慌だしく儀式を行ったが、獲物の前の男達の気はそぞろだ。

柵を振っているシートは、もっと落ち着かない感じだった。

祝詞(のりと)終わって、ヤンは隣のフウヤを小突いた。

「お前、狩りから帰った時は一緒にいたよな?」

「うん、でも、シートが戻らないって騒ぎになったろ? シ

ータはともかく、カーリが何かやらかしたんじゃないかと思っ

て、慌てて抜け出したんだ。そしたらすぐそこで、藪を抜けて

来たシートと鉢合わせしたのさ」

「一人でか、誘ってくればよかったのに」

「んん、僕だけなら族長のお説教で済むけれど、ヤンはそうは行かないだろう?。次期狩猟長なんだから。…それよか、後でちよっと話がある」

「?」 なんだよ」

「(こ)ではまずい」

「?」

「一日かかってそれだけなの?!」

養蚕小屋で女将さん達が、山菜かごを覗き込んで嘲笑った。

三峰の女性の本業の糸紡ぎを休んで山に行っただのだから、採っ

た山菜は皆に裾分けする事になっていた。

「(こ)、ごめんなさい」

カーリは泡食って謝った。一生懸命採ったつもりだったので、

全然足りなかったのか。

「まあ、さすがのシートも、この子に教えながらじゃ、こんな

ものなのねえ」

カーリは隣のシートを見上げた。自分のせいで、彼女まで責

められている。

「それっほっち貰ってもしょうがないから、あんた達で分けな

さいな」

女将さん達はさっさと帰ってしまい、二人は気まずい感じで

帰途に着いた。

「シータ、ごめん…」

「……………」

「シータ？」

見上げたシータは、中空を見据えて唇をきゅっと結んでいる。

「シータ…？ 本当「ごめん、わらわが山になんかに行きたがったから…」

「……………」

「うめ…」

「それがいけないのよー！」

シータがいきなり大きな声を上げた。

「お願いだから、そういうのをやめてー！」

「ええっ？」

「この句が継げないカーリを置き去りにして、シータは薄暮の道を走り去ってしまった。

後ろからフウヤに声をかけられるまで、カーリはそこに突っ立っていた。今めった事を言つのは、告げ口のような気がする。

でも、何で急に？ 尾根で別れるまへは普通に優しかったのに。

帰る道々も帰ってから、言われた言葉の意味を、こめかみが痛くなるまで考えた。フウヤに話しかけられても、ずっと上

の空だった。

* * *

欠けた月に照らされる桑畑の外れを、急ぐ人影があった。

「シータ」

呼び止められた人影は、ピクリと歩を止めて振り返る。

「ああ、びっくりした。こんな時間に何をしているの？」

「こっちの台詞だよ。…それなに？」

呼び止めたフウヤが、桑の低木を乗り越えて、黒髪の娘の腕の中の油紙の包みを覗き込んだ。

「何だっでいいでしょ」

「ぶっかん…」

「貴方には関係ないわ」

「ホントに？」

「あ・貴方…？ 今日、藪を抜けた所で、初めて私に会ったのよね？」

「うん、そうだよ」

「……………」

「ねえ、カーリが元気ないんだ。何でか知らない？」

「知っているわ」

「ホントに？！」

「でも、言わない」

「ええっ」

「嘩然とするフウヤを残して、シータは風のように夜の谷へ消えた。」

朝・・・刺すような光・・・下の集落で駱駝の音がする。ああ、そつだ・・・今日は菜の行商人が来る日だ。

蜜柑があるといいな・・・モエギは蜜柑を見ると笑つんだ・・・モエギ？ モエギは何処へ行ったんだろう？

ああ、モエギはもういないんだっだ・・・

光が柔らかくなった。そつだ、ここは砂漠じゃなくて、フウヤと来た、三峰の山。

ベッドに身を起こすと、フウヤは身支度をしていた。

「カーリが寝坊助なんて珍しいな」

「う、ごめん」

砂漠の夢なんて、ここの所、見なかったのに。

「いいよ、カーリのお弁当も作つたから、糸紡ぎ、頑張つてね」

「う・・・うん・・・」

養蚕小屋でシータに会うのが心重かった。

「おはよう!!」

心重いつか思つ暇なしに、黒髪の娘が戸口に現れた。

「わああ!! ちよっとは新婚を気遣えー!」

フウヤの抗議にお構いなしに、シータはすかずかとカーリの前に進んで、山菜かごを突き出した。

「カーリ、今日も私と山に行きましよう。昨日は中途半端だったから、今日は残りの山菜を教えるわ」

「えっ?!」

カーリはタジタジになりながら、助けを求めるようにフウヤを見た。のんびり屋のフウヤも、目を見開いて壁に張り付いている。

「いいわよね、フウヤ」

「う、うん・・・」

「行くわよー!」

口をあんぐり開けたまま、カーリはシータに引つ立てられて山に向かった。

「カーリー!」

「は、はいっ」

「これは昨日教えたわよね」

二人は前日と同じ山陵にいた。

「えーと…えーと…」

「これは食べられる、こっちの根元の色が違うのは食べられないって」

「うん…」

「覚えた？ エライわね、イイコイイコ！」

「・・・」

カーリは引きつって硬直した。シートが『イイコイイコ』なんて言うのを聞いたことがないし、口調が棒読みで、逆に怖いのだ。

「よし、次は、あっちの峰へ行くわよー！」

「ええっ？」

「大丈夫、頑張れば、こんなのすぐ覚えられるわよ」

「……」

カーリは記憶力が悪い訳ではない。ただ、早さとフレッシュシャに弱いのだ。更に、妙にハイテンションなシートの口調が、彼女のパニックに拍車をかけていた。

怖い・・・、帰りたい・・・。

「…シート」

「なあに？」

「あのあの、昨日の事怒ってっつゝ、だどしたら、本当にっつゝめ…」
「違っつたらー！ そっついうのもめっつゝ言っつたでっつゝ！」

シートがいきなり語気を荒げたので、カーリは黙らざるをえなかった。

お昼を食べる余裕もなく夕刻になり、シートが先に立って、今まで行っつた事のない谷に降りた。

「フウヤがまだ谷には行っつちゃダメだっつて…」

「いつまでもそっついう訳には行かないでっつゝ！」

「うん…だけど…」

「貴方、三峰の女になりたいのでっつゝ、それともいっつれ砂漠に帰るから、おざなりでいいと思っつてっつゝるのっ？」

「えっ…」

カーリは顔を上げた。シートはハッとした表情で口を結んでる。

「っ？？？ シータ、分からない、何を言っつてっつゝるの？」

「……………」

黒髪の娘は、向かい合っつたまま何度も唾を呑み込んでる。

「シート、わらわは自分で決めて、フウヤに着いて来たんだ。

砂漠に帰りたいなんて、思っつ善ないだろっつゝ！」

「ううん、そっつじゃなくっつて…」

「っ？」

「フウヤがもし、砂漠に住むっつて言っつたら…、貴方、その方が

嬉しい?」

「??!!」

カーリは、目を睨開いて、口をポカンと開けた。シートが何でそんな事を言うのか分からないが、二人の間に何だかとてもない『ズ』があるのは分かった。

「シート、それは考えられない。フウヤは三峰を愛しているもの」

「だから貴方は『仕方なく』三峰に来たの?」

「……!」

それは…そうだけれど…自分は一生懸命、三峰に馴染もつとしている。それではいけないのだろうか?

——ヒュ——イッ

狩りの指笛だ。二人は顔を上げた。

「…ヤンだわ」

「うん、狩りが早く終わったって知らせだな」

カーリは救われた気持ちになった。少なくともこの場からは逃れられる。

「行かなくてはね…」

シートは谷の道を先に登ったが、数歩歩いた所で、いきなり膝を折ってうずくまった。

「どうしたの?!

駆け寄ったカーリは、はっと息を呑んだ。黒髪のこめかみに脂汗がにじみ、頬が土気色なのだ。

「シート?!

覗き込んだ顔は、いつもの美しさからほど遠く、瞼を固く閉じて荒い息をしている。いつの間にこんなに具合を悪くしたんだろう? そういえば、今日は怖くて、シートの顔をちゃんと見ていなかった。

カーリは一瞬、三峰に来た日の事を思い出した。

「地霊になんか…憑かれていないわよ…」

考えを先回りして、シートが弱く呟いた。

「ちょっと目眩がするだけ。少し休めば治まる…」

「シート、もしかして、昨日もこうなったのか?」

「……」

「病気だよ! 医者に診せなきゃ…」

言いながら言葉が止まった。三峰部落の医師は目の前にいる。

その顔を見て、黒髪の下表情が、ちょっと苦笑した。

「心配しなくていいの、ただの貧血だから。寝不足の時によく起すのよ。少し休めば直ぐに治るわ。皆には言わないでね」

「寝不足…」

そうだ、シートは、養蚕の仕事から帰っても、家で暇さえあ

れば機織りをしている。他所の部族との交流に、彼女の見事な模様織が必要なんだ、ってフウヤに聞いた。

そんな大切な仕事があるのに、自分の為に昼間の時間を裂いたから、徹夜で織物をする事になったのかも。

「シータ、ごめ…」

言い掛けて、カーリは口を結んだ。謝ったって、シータに何の助けにもならない。シータは謝って欲しいんじゃない…。

「さあ、もう大丈夫よ。狩りの男達を待たせちゃいけない」

立ち上がったシータだが、少し歩いてまた屈み込んだ。喉が青黒くなり、全然大丈夫じゃなさそうだ。

「待ってて！」

カーリは自分の上着を地面に敷いて、シータを抱えて横たえた。ハンカチを水筒の水で濡らせて額に当てるが、玉汗が後から後から浮き出てくる。こんな状態なのに、どうしても部落に帰って仕事をせねばならないのだろうか？

昨日からキュウキュウ回し過ぎて張り詰めたカーリの頭のゼンマイが、とうとうこの時、弾け飛んだ。

「儀式なら、わらわがやる!!」

言ってしまったから頬が熱くなったけれど、言葉は呑み込ま

なかった。

「祝詞(のり)とは暗唱している。砂漠の神様も山の神様も、親戚みたいなものでしょ?!」

カーリの心の中に、嫌われるかもしれないとか、気分を害すかもしれないとかいうのは、吹っ飛んでいた。ただ、シータをここで休ませて置いてあげたかった。

「そう…」

意外や、シータは驚きもせず、静かに答えた。

「じゃあ、お願いするわ…」

拍子抜けする程あっさり託され、カーリはシータの気が変わらぬ内にと、急いで立ち上がった。

三歩ほど走りかけたが、すぐ振り向いて、やにわに着ている物を上も下も脱ぎ、黒髪の娘に全てかぶせ、自分は下着姿で谷を駆け上がった。

三峰部落の入り口で、まずびっくり仰天したが、狩りの列のしんがりにはいた少年だった。

次いで女将さん達が金切り声を上げ、これ以上ない早さでダッシュして来たフウヤが、裸同然の娘を上衣で覆った。

一同騒然呆気に取られる中、だんだん上衣にキノコ頭の娘は、一気に獲物の前の祭壇まで駆け付けた。そして、神を掴むや、



鳶(とんび)みたいな通る声で、祝詞を唱し始めた。いつも自信なさげにポソポソ喋る娘の声とは思えない。

狩人達は条件反射で獲物の前に並んで頭を下げた。他の者も狐に摘ままれた顔で静まった。カーリの態度があまりに当たり前然としていたので、皆が皆、へ自分が知らないだけで、何処かでそう決まったんだろう?<と思ったのだ。

祝詞終わって、代理巫女がその場にナハナと座り込んだあたりで、やっとへなんで、どうして?<という空気になった。

問い詰めようと近寄った族長は、カーリの疲弊した顔と、手足の擦り傷に氣勢をそがれた。

「いったいどうしたのだ? シータは何処だ?」

「し、下の谷」...

「何かあったのか?」

「えとえと...」

やりとりをしている間に、部落の口やかましい老人達が、文句を頬袋一杯に詰め込んでやって来た。彼らにとって形式は、どんな事情よりも重要なのだ。

族長は困った感じで、老人とカーリの間に立った。

「この娘は、三峰に来て間もない。大目に見てやろうではないか。」

「そういう問題ではないわい！」

「シータはどうしたんじゃ、シータは!!」

老人達の大声に、事情を知りたい村人が、三々五々集まって来た。このままだと、この気弱な飴色の肌の娘を、吊し上げる形になってしまう。

族長は話を預かってこの場を終わらせようと、口を開きかけた。それより早く、カーリがぱっと顔を上げ、大声で叫んだ。

「シータは！ シータは、大変だと思っ！」

「えっ」

思いがけない話の矛先に、一同、鳩が豆鉄砲喰らった顔になった。飴色の肌の娘は、白くなるほど両拳を握りしめて、一生懸命言葉を搜している。

「シ、シータは、やる事が一杯あって大変だと思っ。何をやってても誰よりも出来ちゃうから、誰も代われない。でも、もし…た、例えば、病気だったりしても、言わないで、きっと一人で頑張っちゃう。何でも出来るからって、病気まで治せる訳じゃないの」

皆、目を丸くしてカーリを見ている。

確かに、何をやっても完璧に出来てしまうシータに、気軽に『代わっちゃうか?』なんて言えなかった。でも、シータだって、

沢山の仕事をすれば、疲れる。疲れれば身体だって壊してしまうだろう。当たり前前の事なのに、言われるまで考えない事ってある…。

「だから、シータのやる事を、一個でも引き受けようと思った。神様へのお祈りなら、清宮で毎日やっていたから。でも、山の神はお気を悪くされたか?」

カーリは大真面目な顔で、凝り固まった老人達を見た。

「それだったら、わらわだけにバチを当てて欲しい。山の神にそういう風に頼んでくれ」

「バチなんか当たんないわよ！」

女性の甲高い声が上がった。その声を皮切りに、次々と女性達が声を上げた。

「立派だったわよ、心配要らないわ！」

「ご苦労様、カーリ！」

「ちゃんと出来てた、えらいえらい！」

日頃系紡ぎ場で、カーリの事をドン臭いだの不器用だのと、散々嘲笑っていた女将さん達だった。

「だ、黙らんか！ そういう問題ではないわ」

老人が精一杯対抗した。

「じゃあ、そういう問題なのさー！」

古者達と女性陣の言い合いになってしまった。

おろおろするカーリの隣に、フウヤがツイとやって来た。

「なかなかイケてたよ、カーリの巫女さん」

「フウヤ、どうしたらいい？」

「ダイジョブダイジョブ、この部落は、養蚕小屋の女将さん達

が、いいって言ったらいんだ」

「そうなの？」

「そうそう。これから時々シータと代わってやればいい」

「シータ！ そうだフウヤ、シータが谷で…」

「ダイジョブダイジョブ、さっきのカーリのへ例えは病気だっ

たりしてもくの迎りで、血相変えて走って行った奴がいるから」

「シータ!!」

ケンケン「ゴウゴウ言っていた声が途絶え、部落の入り口に、

黒髪の娘を背負ったヤンが姿を現した。

今日の三峰の尾根も、春霞にけぶっている。

シータは、墨で線を引いたような黒髪をなびかせながら、山

陵の岩肌に腰掛けていた。

「見て、シーター！」

キノ「頭の娘が、山菜カゴを抱えて駆け登って来る。

「一人でこれだけ採れたよ！ 間違っていないでしょ」

「どれどれ」

シータが山盛りの山菜カゴを選っている間、カーリは脇でそわそわしている。

「全部正解。凄いわ、よく覚えたわね。でもこれはなあに？」

シータの掴み出した、こぶし大の木の破片を引ったくって、カーリはそれをカゴの奥に突っ込んだ。

「ダメだよ触ったら。もうちゅっつて起きるかもしれないに」

「おきん？」

「そう、だってそれ、どう見たってネズミでしょ。ほら、ここ

が耳でここがしっぽ！ 『ギタイ』の魔法で木に化けているの

かも」

「……」

「木からネズミになる所、見られるかなあ」

言いながら立ち上がったカーリは、傍らのシータが両肩を抱えてうすくまっているのを見て、慌てふためいた。

「ああ！ ほらやっぱり、昨日の今日でまた本調子じゃないのに、山歩きは無理だったんだよお」

「ち、違っのよ…」

顔を上げたシータは、涙を浮かべてひきつり笑いをしていた。

「いや、あのね…、カーリ、擬態って言うのは…アハハ…あはあは…ああ、苦しい」

シータは笑いながら顔を上げて、霧の隙間に見え隠れする三峰の山々を見やった。同じ繰り返し風景なのに、この娘がいるだけで、今朝生まれたみたいに見え新鮮に見える。

「シータ？」

レモン色の瞳が覗き込む。

「ああ、大丈夫なのよ、そんなに心配しないで」

「ホントに？」

「本当よ」

「織物大変だろうけれど、夜は寝ないとダメだよ」

「織物？ ああ、あんなの急ぎじゃないからいいのよ」

「そうなの？」

「それより、貴方に返すハンカチ、織らなきゃね」

「いいよ、練習で作った下手くそな奴だったもん」

「そうは行かないわ、なくしちゃったのは私だもの」

「仕方がないよ、具合悪かったんだし。それより、何だか安心

しちゃった」

「なあに？」

「シータでも物をなくしたりするんだ」

「するわよ」

シータは草を払って立ち上がり、谷を見下ろした。

そう、一昨日(おととい)の、あの谷の藪の近道から、全てが始まったんだ…。

一昨日・・・

カーリと別れて部落への近道を行っていたシータは、笹藪で何かにつまづいた。足元が見えないとはいえ、勝手知ったる道、こんな所に根っこなんかなかった筈だ。

「いってえ!!」

藪から起き上がったのは、十とおかそこいらの男の子だったが、シータは一瞬息が止まった。だってその子は、顔も手も釜戸の消し炭みたいに真っ黒なんだもの。鮎色の肌のカーリを知らなかったら、地霊か妖怪の類いだと思ってしまっていただろう。

帽子も衣服も、長靴までもが黒つくめで、唯一黒くない白眼の部分だけがやけに鋭く光っている。子供なのにヒトを後退りさせる凄みがあった。

「じいめんなさい。でも、こんな所で何をやっているのよ？」

「別じ…」



子供は不機嫌な様子で、そっぽを向いた。

見れば手足は擦り傷だらけで、着ている物に力ギ裂きが出来ている。黒くて判りにくいが、表情は落ち着かない。

「貴方、もしかして藪に巻かれて迷子になっているの？」

「ち・が・う!!」

子供は即座に言い返した。

「ちょっと風寝をしていただけだ。俺をそこいらのトロい子供と一緒にするなー!」

「そっ、じゃあ、さよなら」

シートはぐるりと背を向けた。

「あ、おい」

「なあに、迷子じゃないのなら、一人で帰れるでしょ」

「……」

「私急ぐの、じゃあね」

去りかけるシートタの前に、子供は無理に回り込んだ。

「待て、ちょっと待て」

「なあに??」

「う、馬が寂しがっているんだ。下の谷で一人で待っている。

回想だとは思わないか??」

「はあっ」

シートは肩をすぼめて溜め息した。

「ねえ、私、本当に急ぐの。谷の見える所まで案内してあげるから、着いて来たかったら勝手に着いて来なさい」

黒髪の女性が先に立ってさっさと歩き出したので、男の子も黙って付いて来た。

「貴方、何処から来たの? 大人の人は?」

「大人なんかいないよ、俺と馬だけだ」

「嘘! 貴方、この辺りの子じゃないでしょ? 子供一人でフ

ラフラしている筈ないじゃない」

「馬鹿にすんな! 俺はそこいらの子供と違う。一人前だから、大人と同じ役割を任せられてここに来たんだ」

「へえ??」

「祖父からの指示を言付かって来た、正式な使者だ」

シートが立ち止まったので、男の子は彼女の背中に鼻っ面をぶつけた。

「いってえなあ!」

「使者って、三峰の族長に御用って事??」

「違う」

男の子は鼻を押さえながら、上目で背の高いシートタを睨んだ。

「カーリというヒトが、最近、三峰に来ただろう」

「? え、ええ…、知っているわ」

シータは真顔になって、子供に正面向いた。

「あのヒトは、砂漠の砂の民の総領の大切な令嬢だ。本当はそんなに簡単に他所にやれるヒトではない」

「……」

「だから、俺が密使として遣わされたんだ。カーリの様子を見て来て、山の暮らしに難儀しているようなら、総領の元に呼び戻すように」と

「ええっ?! そんな!」

シータはまじまじと子供を見た。子供とは思えないはつきりした口調だ。鋭い眼が異常に大人びて見えた。

「だって、カーリは、フウヤを好いてここに来たのよ。それを引き離すっていうの?」

「そんな事するもんか」

男の子の表情は、シータの動揺を見て取って悦を帯びている。

「勿論フウヤも一緒だ。総領の娘婿として、相応の立場と家畜の用意がある」

「……」

「あんだなんかには想像付かないだろうけれど、砂の民は西の砂漠で一番勢力の大きい部族なんだ。財も家畜も桁が違つ」

「お、大きかろうが何だだろうが、フウヤが三峰を離れる筈がないわ」

シータは子供相手にムキになって言った。

「カーリがここで暮らすのに苦労していてもか?」

「そ、そんな事ないわよ、彼女は……」

「修道院で世間ずれしないで育て、総領屋敷でも何不自由なく甘やかされていたんだ。そんなカーリに、この生活をいかに覚えなきゃならないのは、可哀想だとは思わないか?」

「彼女はそんな……」

「カーリって、謝ってばかりだろう?」

男の子は話の主導権を握って、饒舌になっている。

「……」

「自分の世間知らずを自覚しているから、すべ委縮してしまう。生活も習慣も違う知らないヒトばかりの中で、どんなにか心細かろうと、お祖父様は、とても心配していらっしやる」

「お祖父様?」

「総領だ。俺は総領の孫で、カーリの兄の息子だ」

その後、何処をどう歩いて部落に帰ったのか覚えていない。

気が付いたら、いつものように槲を振って巫女の役割をこなしていた。

養蚕小屋で女将さん達が、反応の素直なカーリを面白がって、散々からかう。受け流していればいいのに、彼女はいちいち真

に受けて、確かに、謝りつばなしなのだ。

そんなだから、砂漠の家族が心配するんじゃないの。

酷くイラついて、声を上げて怒鳴ってしまった。目を丸くするカーリの前で、はっと我に返った。自己嫌悪が込み上げて、足が勝手に逃げ出した。

自分でも何でこんなに不安で居たたまれないのか分からない。これはカーリの問題で、自分には関係ない筈なのに？

家に帰っても、食事も喉を通らず、家族に何を話し掛けられなくても答えられない。そしてとうとう、そっと家を抜け出して、夜中の谷へ向かったのだ。もう一度あの子供と話をする為に。

話をしたって、彼はただの使者だ。陰からこっそりカーリの様子を調べて、帰って祖父に報告するという。その内容如何で、砂の民からフワヤに対して、正式な召喚が来るらしい。

そんな大事、自分が口出し出来る筋合いなんてないし、言っただって通らないだろう。ただ、ちょっとだけ…、報告に手心を加えて貰えないだろうか？

夜中、谷を捜したが、夜営している筈の子供に会えなかった。持参したパンとチーズの油紙を自立つ所にぶら下げて、夜がしらみ始めた頃、自宅に戻った。

戻ったって眠れない。あの子供は、自分の手の届かない所か

らカーリを見張っているんだ。そうして彼女を、遠い砂漠の国へ連れ去ってしまう。

カーリがこの部落からいなくなる？ あの頓狂な声を聞けなくなる？ カーリが来る前はそれが普通だったのに、今の自分には、彼女のいない三峰など想像付かなかった。考えれば考える程、イライラして眠れなくなるのだ。

ようやく山端に朝陽の光が見えた時、シータは山菜かごを掴んで、フワヤの家へ走った。

使者が来ている事を、カーリにバラしてしまおうと決心したのだ。フェアじゃないけれど、彼女はきっと黙っていてくれる。

フワヤは駄目だ。三峰を愛しているけれど、それよりもきつとカーリを愛している。女将さん達が大きな声でからかう養蚕小屋も駄目だ。

そう、山に連れだすのよ。二人きりになって、彼女に頼んで芝居をして貰おう。

しかし、無理矢理山に連れ出したものの、相変わらずオドオドしているカーリの前で、シータは使者の存在を言い出せなかった。

言えば、彼女はきつと、一生懸命楽しそうな振りをしてくれ

るだろう。でもそれは、酷く残酷な事なのだ。彼女は砂漠に戻れば、お姫様みたいに暮らせるのだ。

せめて、何処かで見ているあの子供に対して、少しでもカーリが山の暮らしに馴染んでいるアピールをしようかと、頑張ってみた。しかし喋れば喋る程、飴色の肌の娘はこわばって行く。部落の皆は、私が何でも知っていて、何でも器用にこなすと思っている。

まさか！ 彼女一人笑わせる事も出来ないのに?!
 そう、もう認めてしまおう。私はこの飴色の肌の娘が、どうしようもなく好きなんだ。自分が、この娘といたいんだ。ワガママって分かっているのに、自分の心を御ぎよせなくて、オタオタしているんだ。

頭がぐるぐる回って、もう何を喋っているのかも分からなくなってきた。

「貴方、仕方なく三峰に来たの？ 本当は砂漠へ帰りたいんでしょ?!」

気が付くと、トンでもない言葉を口走っていた。目が回って立っていられない。もうダメだ……。
 遠くでカーリが自分の代わりをやると叫んだので、ぼんやりした頭で了承した。

彼女が駆け去った後、シータは掛けて賣った上衣の温もりに鼻を埋めて、ぼおっとしていた。

背後に枯れ枝を踏む音。

「…昨日の子?」

振り向くと、木立の闇の中に、鋭い白眼が浮かんでいた。

「ずっと見ていたんでしょ?」

男の子はムスっとした顔のまま、腰の水筒を差し出した。

「貴方の言った通りよ。本当に、不器用で純粋なお姫様。あれじゃ確かに、ここで生活するのは辛いかもね」

弱々しく言って、シータは水筒に口を付けた。そういえば、タベから、何も飲み食いしていない。

「どっちが不器用なんだよ・・・」

男の子はボソッと呟いた。

「え? なんて?」

「いや…パンとチーズ、ありがと」

「どういたしまして」

シータは脱力したまま、膝を抱えて丸くなった。

「大丈夫かよ?」

子供は屈んで、シータの背中をさすり始めた。

誰かに手を当てて貰うだけでこんなに楽になるなんて、知らなかった…。

「ありがとう、貴方、さするのが上手いのね」

「俺は下手だよ」

男の子は照れ臭そうに手を動かし続けた。

「カーリは凄く上手だよ。母(母)は(は)じ(じ)ゃは俺がさすっても苦しいままなのに、カーリが手当てすると一発で楽になるんだ」

「お母さん？」

シータは黒髪の下の目を上げた。

「ああ」

子供はシータの視線を逃れて、またそっぽを向いた。

「俺が小さい時からずっと病気で、ちっともぐんぐんならないのに、カーリはずっとずっと看病してくれていたんだ」

「……」

「死んじやっただけだね」

「……」

シータは色々な事が分かった。フウヤが、決まったヒトがいるのに、なかなか三峰に連れて来なかった理由。

そっぽを向いたままシータの背中から手を離し、子供は小さく口の中で言った。

「…すまなご」

「え？ なあに？」

「昨日言ったあれ…」

「ん？」

「嘘なんだ」

「ええっ？」

シータは身を起こした。

「嘘って、どこからどこ迄が？」

「全部」

「せ…せん…ぶ？」

「お祖父様や父者が、カーリを心配しているのは、本当だよ。あの世間ずれしていない子が、知らない環境でさぞや苦労しているだろう…って、いつも話している」

「……」

使者ぶって喋っていたのは、大人が喋っていた事を、そのまま真似しただけだったのだ。

「でも連れ戻そうなんて話はないんだ。カーリは確かにドン臭いけれど、どんなに強くて折れないか、皆、知っているから」

「…ああ、そうね」

シータは素直にうなずいた。

「でもひどいわよ。私、真剣に受け止めちゃったわ」

男の子は横を向いたまま、口を尖らせて、ぼそぼそ言った。
「だって…、カーリがあんたを呼んでいたら…」

「え？ つい？」

「呼んでいたら、馬のいる尾根の上で、何かが一抔あるとか」

「あ…ああ、あれね」

男の子が言葉を止めて黙ってしまったので、シートは彼の横顔をまじまじと見つめた。よく見ると、黒い頬に鼻水がテカテカして、そこいら辺の子供と変わらない。

そうして、シートは、やっと一つの事に思い至った。

昨日…、藪の中で、この子は倒れていたんじゃない。

突っ伏して、泣いていたんだ…。

「ねえ、カーリは、心配しなくても、ここで幸せになれるわよ。彼女、本当に頑張り屋さんだもの。私も、村の皆も、手助けするし…」

「分かっているよー！」

男の子は大声で叫んだ。

「そんな事分かってる！ あんたに言われなくても、分かっているんだ。俺の方がカーリの事、ずっとずっとよく知っているんだから！」

喋る程に感情が高ぶって、声が上がってきた。

次の瞬間、子供の後ろの藪から一人の男性が飛び出して、彼の頭からマントを被せた。

「うああっぶい！」

「大人しくしろー！ この家出小僧！」

マントごと子供を押さえ付ける鮎色の肌の男性に、シートは見覚えがあった。

「シ、シドさん？！」

「やあ、シートだね。大きくなったな、見違えたよ。イフルート、元気？」

父の古い友人の西風のシドは、シタバタするマントを押さええながら、なつっこく笑った。

「はなせ〜」

「大人しくしたら離してやる」

啞然とするシートの前で、男の子は散々もがいた拳句、マントの端から顔を出した。

「まったく、総領屋敷は大騒ぎだ。カーリに会いたいんだっただら、一言相談してくればいいのに」

「そんな事出来るか！ 自分の事は自分の力で出来る！」

「素直じゃないな、アディ」

「俺をアディって呼んでいいのは、カーリだけだ！」

憎まれ口をききながらも、彼がホッとしているの分かった。

そう、シドがマントを被せてくれなかったら、情けないペソかき顔を女性に見られてしまったのだから。

「あの…」

シータがそっと口を挟んだ。

「その子を叱らないでやって下さい。大人達は何気なく話すカーリの心配を、この子はそのまま受け取って、居ても立ってもいられなくなって飛び出してしまったんです、きっと」

男の子は動きを止めて、上目でシータを睨んだ

「ぶ、ぶんー」

まだ強がっている子供を、シータはそっと見つめた。

そうして心配を募らせて、遠い道のりをやっと会いに来たのに、カーリは自分の知らない者の名を、楽しそうに呼んでいた。

どんなにかショックだったろう。悔しくて切なくて、それでつい、八つ当たりの嘘を言ってしまったのだ。

シータにはよく分かった。何故って、自分がさっき迄、その気持ちだったのだから。

「シドさんも、アディも、部落へおいで下さいな。カーリ、きっと喜びますわ」

「だからアディって呼ぶなー」

男の子はキッと言い返したが、一拍置いて、首を振って俯うつむいた。

「…会わない」

「むじむじ」

今度はシドが口を挟んだ。

「そうだな、カーリが一生懸命自分の道を歩いているのに、お前が家出して来たなんて聞いたら、後ろから引っ張られるみたいな物だからな」

「うるさいなー」

「それが分かっているんなら、偉いぞ、って事だ。会うんならとっとと一人前になって、総領殿や父上に認められてから会いに来るんだ。その方がカーリ、どれだけ喜びか」

「言われなくともー」

尾根の方に、藪をかき分ける音と、ヤンの呼び声がした。

シドは、子供の腕を掴んで、谷の下へ向いた。

「じゃ、シータ、僕らの事は、皆に内緒だな」

「え?! 本堂に行っちゃったのっ。ヤンに会いに行けばいいの」

「ああ…、それはいいんだ」

「いいの？」

「会える時が来れば、会いに来るさ」

シートは慌てて、手の中にあつたハンカチを、男の子に差し出した。

「これを」

「なんだよ」

「この刺繍の花は、山紫陽花やまあじさいっていつの。三峰の女の子が、最初に習う刺繍」

「??」

「カーリが生まれて初めて、自分の紡いだ糸で刺した刺繍よ」

「・・・!!」

「砂漠のカーリの家族に届けてちょうだい」

黙ってハンカチを受け取る子供の手をぐいと握って、シートは刻むように言った。

「私達・仲間・だねー!」

「はあ。」

「カーリを、大・大・大好きな、仲間よ!」

男の子は目を丸くしたが、照れ臭そうに真っ白な歯を見せて笑ってくれた。ヤンの声が更に近付き、砂漠の民の二人は、氣配を殺して藪の奥に消えた。

そうして、シートは、ヤンに背負われて部落に帰ったのだ。

夕風が春霞を流し、若草に色付く峰々を見せる。

「シート、シート?」

気が付くと、また、レモン色の瞳が覗き込んでいた。

「ぼおっとしてる、大丈夫か?」

「大丈夫よ。私だってぼおっとするの」

「うん」

「さあ、帰りましょう」

シートは立ち上がって先に立ったが、すぐ振り向いて、手を差し出した。

「あはー!」

カーリは、ぱつと顔を輝かせて、その手を握った。

そうして二人は、山紫陽花の蕾膨らむ三峰の尾根を、並んでゆっくり歩き出した。

この花は、根に触れる土によって色を変えるが、どんな場所であつて、強く美しく花を咲かせる。

居場所って、頑張つて作る物じゃない。誰かを好きになつたり、好きになつて貰つたりして、自然に出来て行く物なのだ。

くおしまい



「余話」

「で、アデルは帰っちゃったの?」

峰の岩上で、ヤンはフウヤに話し掛けた。彼のいい眼は、二つ向こうの尾根を仲よく歩く、二人の女性を映している。

「うん、シドと一緒にね」

白毛のフウヤは、彼の一段下で、反対側の谷を見下ろしながら答えた。

「会いたかったな、ルウシエルの弟。シドの話だと、ルウに輪をかけてきかん坊らしいけれど。せっかく来たんだし、素直にカーリに会って行けばよかったのに」

「意地っ張りが服を着て歩いてるみたいなモンだからな、あそこの家系は」

「昨日、カーリとシートを捜しに出たフウヤは、藪の手前でシドに会った。アデルが家出したから、連れ戻しに来たという。

「こっそりヤンも交えて話をし、アデルを少しの間、好きなようにさせてやってくれ、と頼んだのはフウヤだ。

「大人が、これはイケマセンと中途半端に阻止したら、子供の心は宙ぶらりんのままだから」

「おお、出だな、大人発言。ついこの間まで、子供っぽくフラフラしていた癖に」

「痩せても枯れても、もうじき妻帯者だぞ。それに、モエギに頼まれた事があるんだ」

「んん?」

「アデルのいい兄貴になってやってってくれって。弟は大事にしながらやらなさい」

「うん、…そうだな」

ヤンは目を細めて、白い子供が初めて三峰に転がり込んで来た日を思い出した。

「もうじき妻帯者なんだよな、…あのフウヤがねえ…」

「ヒトの事言えるのかよ、自分はどうなんだ?」

「えっ!」

「今なら、かの女性の心も、大分素直になって、ヒト恋しくなっているみたいだぞ」

「お、おいおい! 何で話がそっち方向に行く?!」

「その点はアデルに感謝しろよ、…お、鹿だ!!」

白い青年は弓を挿んで走り出し、仲間に合図するヤンの指笛が、微かに夏色を帯びる三峰の空に響いた。

「おしまい」

